撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）

門司港駅

福岡県北九州市

「もじこう」。ホーム屋根の梁に掛けられたひらがなの駅名標が、ノスタルジーを誘う。大勢の旅人が、この手書きのような温かい駅名標に見送られてきたのだろう。一直線の長大な二本のホームは、往時の隆盛を伝える証しだ。潮の香りが漂う夜のホームは乗客も少なく、時が止まったような空間だった。九州の鉄道の起点終点として、本州につながる石炭や米などの物流の拠点として、大正から昭和初期にかけて黄金期を築いた。中国など海外との交易も盛んだった。

門司港駅の前身は九州鉄道の門司駅で、一八九一（明治二十四）年に開業した。一九一四（大正三）年に移転し、現在の駅舎となった。木造二階建てのネオルネッサンス様式の建物で、「門」の文字をイメージ、そのシンメトリーな姿は美しく、ホーム同様に旅情を掻き立てる。ドイツ人鉄道技師、ヘルマン・ルムシュッテルが監修した。一九八八（昭和六十三）年に鉄道駅舎としては初の国の重要文化財に指定されている。

一九四〇年代前半の関門トンネル開通を経て、連絡船の乗換え客などで賑わっていた駅の役割も徐々に変化していった。そんななか、歴史の継承を目指して二〇一二年から保存修理工事が始まった。六年半後の二〇一九年、創建当時の駅舎が復原され、レトロな門司港駅として新たなスタートを切った。

交通の要所から観光地へのシフトである。駅舎の内部は大正時代の面影を残す落ち着いた色調と装飾で、細部にまで当時のデザインが忠実に再現されている。歴史と文化が息づき、過去、現在、未来をつなぐ物語を肌で感じることができる。耳を澄ませば関門海峡を行き交う船舶の汽笛が聞こえてくる。何と贅沢な時間だろうか——。

昭和初期、門司駅は活気に満ちあふれ、行き交う人の波も途切れることがなかった。折しも自動車の利用が急増。そのなかで悩ましかったのが雨で、乗降客の濡れる光景が常態化していた。解決策が1929年の大きな庇の設置である。シンメトリーの美しいデザインは機能性重視の時代にあっては、影にかくれた。2019年の復原工事でこの庇が撤去され、創建当時のデザインが復活した（提供：九州旅客鉄道㈱）